



気になるあいつ
わかぎるふ

双葉社

終電

この一月半、神戸に通ってる。新開地にあるホールの企画で芝居の作・演出を受け持っているからである。関西に住んでいないと、分かっただけないかもしれないが神戸は遠い。東京と違って関西はどの県も独立している。神戸に生まれたら神戸から出なくても、仕事もあるし住み心地もいい。京都の子は京都好きなので、あまり大阪や神戸に興味がないと来ている。もちろん我々大阪人だって「大阪が中心やん」と思っているの、遊びに行く程度にしか他の県にはいかない。周辺の和歌山、奈良、滋賀がベットタウン化していることもあってか、他県に出てくる

人たちは多いのだが…。

ま、就職や遊びの話ならそれはそれで収まってしまっただが、なんといつても今回は芝居の稽古である。劇場の大半が大阪にあり、やはり位置的にも一番真ん中にあるのは大阪なので、ほんの一時間でも神戸に中心がズレると大変なのだ。

なんせ大阪までなら一時間で来れるという生徒たちが、神戸に通うととんでもなく遠い思いをしてこなくてはならないからだ。関西では電車に一時間以上乗るといふ行為は、「めっちゃくちや遠い」という事にイコールしているのである。生徒の中には、

「奈良なんでも帰れないと思ってウィークリーを借りました」という子もいるくらいだ。

そんな生徒が出る原因は終電が早いという点にある。各県が独立して感じるで成り立っているのです、関西の終電は東京のそれと違って早い。地下鉄なんて11時過ぎでおしまいになる線もある。JRはさすがに12時半

くらいまでであるが、それも神戸↓大阪間くらいである。その先に帰る人間は自力でどうぞぞということになる。

芝居の稽古が終わって、よし飲みに行つて話をしようと思つても、みんな「終電がありますんで」と帰らなくてはならない。ゆっくり腹を割つて話す時間もないという状況だ。大阪で稽古してる時なら、

「うちに泊めてやるから来い」

なんて簡単に言う私自身が、終電を気にしなくてはいけないという情けない状況だ。

携帯に写真機能がついていて良かったと今回ほど思ったことはない。待ちうけ画面に終電の表示を出して、常に見ながら飲みに行つているといふ毎日である。小劇場の世界では神戸は過疎地であり、そこに集まつて稽古をするということが困難だということが今回はよく分かった。それでも少しでもチャンスをと、思つて集まつてくれる若者達は一生懸命だ。それを思うと私も根はあげられないなとは思つが…今週から稽古は

劇場でやることになり朝の10時から夜の10時までである。

さすがに大阪に戻ってる時間よりも仕事と睡眠の時間を確保するため
に劇場の近所のホテルを押さえることにした。待ち受け画面もお役ご免
になるということだが、関西人がいかに長距離移動に弱いか今回改めて
身に染みた。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっここのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
